京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター

しえらっく

Centro de Estudios Latinoamericanos de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto
Centro de Estudos Latino-Americanos da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

vol. 51　2026年9月1日　京都外国語大学



第 24 回ラテンアメリカ教養講座　開催

京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター主催の第 24 回教養講座は、「キュレーターが語る大学ミュージアムの世界」というタイトルで、2026 年 6 月 5 日から 6 月 26 日の毎週金曜日に開催された。

大学が有する美術館・博物館・資料館（ミュージアム）は、それぞれの建学の理念や専門分野に応じて多彩な美術品や歴史資料を収蔵し、研究のみならず展示・教育にも活用している。今回の教養講座では、こうした大学ミュージアムのキュレーターを講師に迎え、古代アンデスの美術品からラテンアメリカの近現代美術、各館が所蔵する貴重な資料まで、それぞれの現場からその魅力を語っていただいた。



生け花と古代アンデス美術品
～国際文化資料館所蔵小原豊雲コレクションについて

南　博史

京都は、「大学のまち」といわれるほど数多くの大学が市の内外にある。その大学の多くには美術館、博物館、資料館といった施設（ミュージアム）をもっている。その施設では、それぞれの大学の建学の理念、歴史、そして専門分野によって、さまざまな美術品、歴史資料など、文化遺産の数々を収蔵し、研究だけでなく、展示・公開し、教育活動や社会活動に活用していることは、あまり知られていない。大学博物館は大学をもっとも特徴づける施設でもあり、地域社会に開いている施設である。

第１回は、京都外国語大学国際文化資料館が所蔵する「小原豊雲コレクションについて」をとりあげた。小原コレクションのもっとも中心となる作品は、「古代アンデスの美術品」として、いけ花の小原流三世家元小原豊雲氏が収集されたものである。古代アンデスの各地域、各年代から広く収集されていること、そして多種多様な染織品が特徴である。

神戸市御影にあった豊雲記念館では、豊雲氏が世界各地でいけ花の普及活動をされたことをきっかけに世界の古代文化の多くの作品を収蔵していた。こうした古代の美術品は、小原豊雲氏がのちに「豊雲前衛」という独自のいけ花のスタイルを創り上げた花卉の背景となっていた。

小原豊雲氏の活動について、自身はその著書の中で以下のように記している。

「私は大阪の船場の生まれである商人町の真ん中で言わば都会育ちの少年であったにもかかわらず、子供の頃から昆虫が好きであった。特に甲虫類には異常なまでの関心を持っていた。カミキリムシ、クワガタムシ、カブトムシ、タマムシなどの形態や色彩が子供の心を引きつけたのだろう。その後、花道の世界に入っても植物の色々なものの中で、やはりグロテスクなものが好きである。（中略）そのような性格を反映したのであろう私のコレクションには南洋土俗、民芸品やペルシャの古い土器、メキシコの土偶をはじめ、ペルーの古代の織物や土器が多く、いずれも素朴な世界の中にある力強い造形やアニメティックな進行に裏打ちされた品々である。

（中略）

これらの品に花をいけ、時には花に配していけ花展をしたこともある。いけ花とは花と花の、花と器の、あるいは花と環境との出会いの面白さであると考えているが、古代の人達の手になるこれらの品々が、花と出会った時、一層輝きを発信するように感じるのは私だけだろうか。

ともあれ、こうした品々は、私がいけ花をする上で、創作の意欲を喚起してくれ、私の心の糧となってくれるものである。」

古代アンデスのみならず古代の人々が作った作品に触発された芸術家は内外に多くおられる一方、こうした魅力を感じた方は少なくないと思う。ラテンアメリカに深い関心を寄せてきた本学の国際文化資料館には、こうした作品が多く収集されている。学術的な価値にとらわれがちな中にあって、人間の本性に率直に語りかける作品の魅力を素直に鑑賞するのも良い機会かと思う。

（本学教授／IELAK 研究員）

芸術家　忍 Tobita　の不思議な世界

羽生　由喜子

本学の国際文化資料館の収蔵品の中には、不思議な作品群があります。芸術家、忍 Tobita の作品群です。本稿では、生涯にわたって芸術活動を続けた彼の足跡を辿りながら、魅力ある作品をご紹介したいと思います。

Tobita は、1950 年に静岡県に生まれ、洋画家・小堀稜威雄（1895 ～ 1988）に油彩を学んだのち、東京の文化学院に入学、デザイン科と芸術科を卒業しました。その後、1974 年にメキシコを初訪問のあと、一度は高校の美術教師になるものの、1978 年、再度メキシコへ渡り、サンカルロス大学に入学、銅版画をマスターコースまで進みます。彼の銅版画の作品は、国際文化資料館の収蔵品を見ると、1977 年から 1989 年まで確認されており、特に 1977 ～ 79 年は銅版画の制作に力を入れていたようです。

このころの作品は、メキシコの古代文化に影響を受けて制作されたものが多くみられます。スペインの征服によるピラミッドの破壊や虐殺といったことに心を寄せ、全体に暗い色合いで、ミステリアスに表現されています。このような作品は、彼の創作活動の中心ともいえる部分で、この銅版画時代の着想にアレンジを加えながら、油彩・水彩・壁画・陶芸へと表現方法を広げていきました。

メキシコでの彼の特徴的な活動の一つに、1988 年～ 92 年に集中する壁画制作があります。現存は確認できていませんが、彼が残した記録写真からは、メキシコ・オアハカ州、チアパス州、モローレス州に 22 ヶ所 26 件の壁画、日本に 4 か所 4 件を制作したようです。

Tobita 自筆のメモによれば、1990 年にフチタン市のメルカドの外壁に 3 つ、内壁に 2 つの壁画を 4 日間で描き終わったのち、疲労のため入院したとあり、彼の創作活動の凄まじさを物語っています。

壁画制作をしながらも、平面での表現に限界を感じた Tobita は、陶芸彫刻へと表現方法の幅を広げていきます。一時帰国して日本の陶芸も学び、それらの技術を持ってメキシコへ戻り、文化センター内に、自ら素焼き用の窯を設けて作陶を始めます。

Tobita の多くの作品に共通するのは、「目」です。初期の作品を見ると飛ぶ鳥を描いているようですが、のちの作品では、瞳が描かれ、それが「目」であると認識できます。いったい誰の「目」なのか、解釈は難しいですが、不思議な世界観を強調するモチーフの一つです。

Tobita は、メキシコと日本を行き来しながら独特な画風を確立しただけでなく、さまざまな芸術家とも交流を重ねました。そんな中で、メキシコ人の画家を招待した「メヒコ・イマジュネーション」と題した展覧会を日本国内で数回開催しています。第 1 回の会場は、本学のユニバーシティギャラリーでした。これは、本学で教鞭をとっておられた故大井邦明教授とのご縁からのものです。

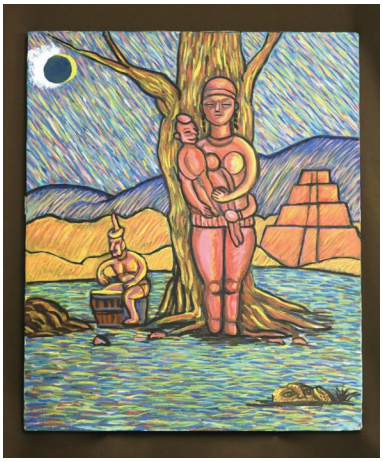
Tobita は、1993 年、本格的に日本に帰国します。帰国後は地元である静岡県にカルチャーセンター「地球号文化センター」を作り、芸術活動の拠点としました。以降、作陶に力をいれながら、多くの作品を生み出していきました。

2003 年、52 歳で生涯を終えますが、のちに開催された追悼展の図録には、小柄な体の中に信じられないくらいの情熱を持って創作活動にあたっていることや、作品の制作の速さを挙げる追悼文が寄せられ、彼の芸術に向かう姿勢を窺うことができます。残念ながら、彼が生涯創作した作品の正確な点数は不明です。幸い国際文化資料館には、ご遺族からのご厚意によって、259 点の作品群が寄贈され、日本では最大規模のコレクションを形成しています。

日本ではあまり知られていない Tobita ではありますが、この機会にこのような芸術家がいたことを記憶にとどめていただければ幸いです。

（角屋もてなしの文化美術館副館長／本学非常勤講師）





（画像：「夜がやってきた」版画（1978 年制作）とその後に描いた油彩画）





（画像：壁画「フチタンに飛田参上」、「金剛力士像」）

ジャマイカのアートって？ ―近代ジャメイカン・アートの成立―

芳野　明

カリブ海に浮かぶ島国ジャマイカはアフリカ系黒人が人口の 92.1％を占めている。1494 年にコロンブスがジャマイカに到達して以来、160 年あまりスペインの支配下にあったが、1655 年にイギリス軍がこの地に侵攻して勝利を収め、その後 300 年以上、英国の植民地となった。1962 年、ジャマイカは念願の独立を果す。その直前にイギリスとの交渉にあたったのが、後に国家英雄（National Heroes）のひとりに選ばれた当時の首相ノーマン・マンレーだった。

ところで私がジャマイカとの関わりを持ったのは、前任校の弘前大学の医学部と JICA によるジャマイカの「南部地域保健強化プロジェクト」に参加した時のことだ。現地の医療関係者に健康教育教材の制作を指導したのだ。そして 2 度目の滞在の際、在ジャマイカ日本大使館から「ジャマイカ・日本芸術祭」を企画してくれと依頼され、さらにもう一回渡航することになった。

この芸術祭の会場となったのが“Edna Manley College of the Visual and Performing Arts”（以下、「エドナ・マンレー芸術大学」）だ。エドナはノーマンの妻だった。彼女はイギリス人の父とジャマイカ人の母との間にイギリスで生まれ、いくつかの美術学校で学び、彫刻の分野で頭角を現す。1921 年にノーマンと結婚し、翌年にジャマイカに移住するが、その後もイギリスをたびたび訪れて彫刻を発表していく。つまり彼女は宗主国であるイギリスの美術環境の中で育っていったのだ。

1935 年から 40 年にかけて、エドナは代表作である《起ちあがる黒人》を制作する。この作品では上半身のみの黒人が顔を上に強く向け、両腕を（おそらくは）地面に強く突いて、起ちあがるというよりは下半身を拘束している何かから抜け出そうとしている様子が表わされている。

エドナは 1950 年にエドナ・マンレー芸術大学の前身であるジャマイカ美術学校の共同設立者となる。こうしてジャマイカでも本格的（西欧的）美術教育が始まった。現在でも大学クラスの芸術教育を行っている学校はジャマイカではここしかない。だからジャマイカで美術の高等教育を受けた作家たちは必然的にエドナの教えに直接／間接に触れることとなった。

エドナがモチーフとした黒人の多くは大きな目に分厚い唇、女性であれば豊満な、「紋切り型」の姿だった。それは後に批判にさらされたイギリス出身のヒュー・ロフティングによる『ドリトル先生アフリカ行き』（1920）の挿絵に登場するアフリカの王子バンポの姿を彷彿とさせるものといえる。この大学の卒業生の作品を見渡すと、同じような特徴を見出すことができる。これらは、かつて欧米人が日本人をメガネにツリ目、出っ歯で首からカメラを下げた紋切り型の姿で表わしたこととパラレルな関係にあると思う。また意図的に頭部や顔の造作を表わさない人物像も多く見られるが、人の外見的個性が現れる「顔」を省略するということを、没個性化＝紋切り型のヴァリエーションと捉えることも可能だろう。

ジャマイカの近代アートに見られるこのような特徴を、作家である彼／彼女たちのまなざしが欧米化してしまっていたと解釈することもできるし、「黒人」としての自分たちの特徴を前面に押し出した強い意志の表われと見ることもできる。私自身は前者の解釈に傾いているが、まだ断定するまでには至っていない。

ジャマイカ美術の原作を見る機会は日本ではほぼ皆無だが、Web で“Modern Jamaican Art”と検索すればデジタル画像はたくさん見られる。みなさんもご自身でジャマイカの近代美術に触れていただきたい。

（嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学附属博物館館長）

権利の関係上、写真を掲載することができません。エドナの作品は右の Web サイトで見ることができます。

天理参考館のラテンアメリカ資料

荒田　恵

天理参考館は天理大学の付属施設であると同時に、世界の生活文化と考古美術を学ぶ博物館として、広く一般にも公開されている。1930 年に天理教第二代真柱中山正善によって創設され、今年の 4 月 28 日で創立 96 年を迎えた。

当館の創立は天理大学の前身である天理外国語学校の創設と深いかかわりがある。天理外国語学校は、1925 年に海外布教を目指す人々を養成するために設立された。しかし、二代真柱は海外で布教するにあたり、言葉の習得だけではなく、現地の風俗・習慣もあわせて学ぶことが必要だと考えた。なぜなら、言葉の背景にある文化と価値観の理解なくしては、本当に心の通った会話はできないと感じたからである。そこで、1926 年と 1930 年に行った朝鮮半島や中国の巡教で、実際に使用されている民族資料を収集し、これらを日本に持ち帰り天理中学校で「支那風俗展覧会」を開催した。収集資料は展覧会後に現在の天理大学 1 号館の 4 階にまとめられ、「海外事情参考品室」として保管したことが当館の出発点となった。

その後、数回にわたり名称を変更し、天理大学の付属施設となった 1950 年に天理大学附属参考館となった。そして、1956 年に教祖（おやさま）70 年祭を記念して東の「おやさとやかた」へ移転した時に常設展を一般に公開し、文部省より博物館相当施設の指定を受けた。現在の新館に移転しリニューアルオープンしたのは 2001 年である。

当初は民族資料の収集に力を入れていたが、その後、古代の人々の“もの”にこそ本来の素朴な人の心が見いだせると考え、考古学資料の収集も行うようになった。その過程で日本民俗資料と交通文化資料もくわわり、現在当館が収蔵する資料は 30 万点にもおよぶ。そのうち約 3900 点がラテンアメリカ資料で、最も資料点数が多い国はメキシコで、次いでブラジル、ペルー、ボリビア、グアテマラ、コロンビアと続く。

1968 年以降、天理参考館と東京の神田にある天理ギャラリーで開催されたラテンアメリカ関連の展覧会は合計 14 回あるが、当館の展覧会の巡回展と位置付けて天理ギャラリーで開催したものも含まれる。展覧会の内容は、メキシコやグアテマラの民族衣装、アンデスの染織、そしてメキシコの土器やアンデスの土器など、地域や資料に偏りがみられるが、ブラジルで暮らすアマゾン先住民と天理教海外布教のためにブラジルに渡った人々の生活道具を展示した展覧会もあった。

上記の展覧会のうち筆者が担当したのは天理ギャラリーで開催した巡回展を含む 3 回で、ペルーとボリビアの土器および木器の真作と贋作を同時に展示した。その目的は、古代文化の紹介だけにとどまらず、現代社会において古代文化が消費され再生産されているさまを示すことにあった。なお真贋判定は、2001 年に東京大学総合研究博物館で開催された特別展示「真贋のはざま　デュシャンから遺伝子まで」を参考に、X 線 CT で内部構造を観察して現代の後補の痕跡を特定して行った。さらにこの手法を、注口から液体を入れて揺り動かすことで音を鳴らす笛吹ボトルに援用し、外観からは見ることができない内部構造を観察できるメディアコンテンツを制作した。これらは「令和 2 年度・3 年度国立民族学博物館公募型メディア展示」事業の支援を受けて提供した体験型のコンテンツで、一つはタブレット端末を操作して視覚と聴覚で直感的に土器の内部構造を理解し、もう一方は VR ゴーグルを装着して土器の内部に入り、没入感を味わいながら内側から観察できるものであった。このように、当館のラテンアメリカ資料には様々な観点で展示できる興味深い資料が多い。

（天理大学附属天理参考館学芸員）

連載：マヤ社会を考えるために

第 21 回　野外調査で思ったこと：「井戸」の周りの社会

大越　翼

「井戸がいつ頃作られたのかが分かれば、村の歴史を別の視点から見るのではないか。」カンペチェ州カルキニ市ヌンキニ村の通りをあてどもなしに歩いている時に思った。ここには古い井戸が多い。地上に丸い口だけを開けて、その周囲に石が敷いてあるもの、あるいは私たちが日本で馴染んでいるような、筒状の壁を持ったものがある。すでに閉じられて使われていないことが歴然としているものが大半なのだが、今でも使っているのではないかと思う、よく整備された井戸もある。**（写真 1）**「散在する古い井戸の分布を調べれば、植民地時代におけるその村の街区の広がりがわかるのではないか。」「古井戸に何家族が依存しているのかを調べ、家族を構成する人数を割り出せば、この村のおよその人口もわかるのではないか。」いくつもの調査構想がどんどん湧いてくる。そこで、考古学者である友人に尋ねてみたら、井戸の掘削年代を同定するのは困難だとのこと。私の想像は、シャボン玉のようにパチンと音を立てて消えてしまった。でも、何となく植民地時代に起源があることは間違い無いのではないか。いつか役に立つかもしれないのだから、地図にその位置を記していこうと決めた。



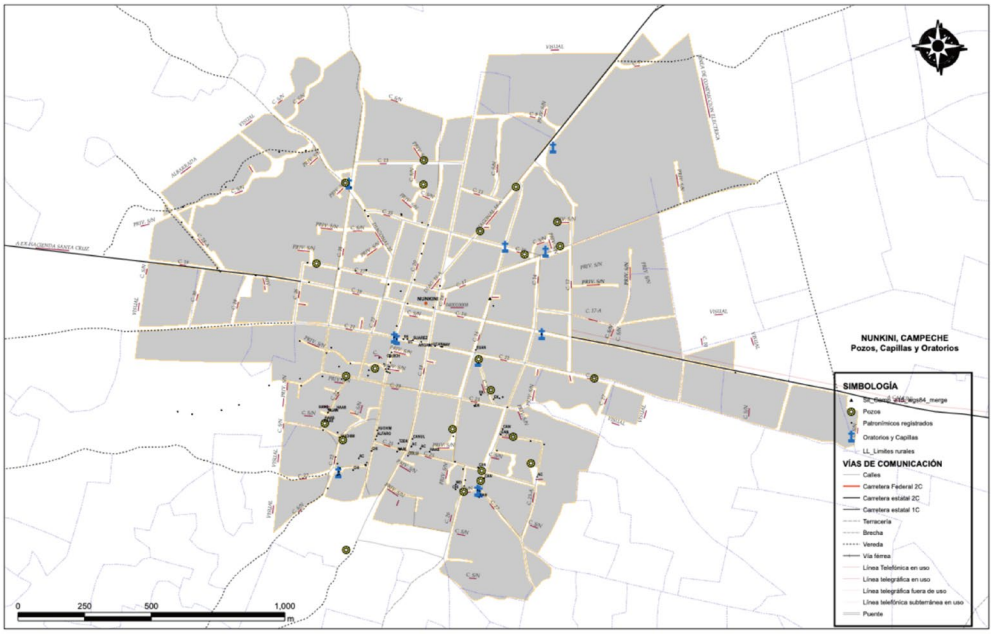
写真　1 ヌンキニ村の井戸
（2008 年 9 月 1 日筆者撮影　©Tsubasa Okoshi）

村の歴史を知ろうとする時、私たちは教会や植民地時代の古い建物、あるいは先スペイン期の遺構などにまず目がいく。そのどれかをもとに、資料を探して図書館や古文書館などへ赴くのだ。しかし、私が目をつけたのは、村人が大して関心を払っていそうにないこれらの古井戸であった。2008 年、今から 18 年前にこのことを思いつき、その頃知り合いになったヌンキニ村のドン・ニーショに情報提供をお願いして、村中を歩き回った。約 2 シーズンをかけて調査した上で作成したのが、この地図だ。**（地図 1）** ここには井戸の分布のみならず、小さな礼拝堂（capilla）、いくつかのバリオ（barrio 地区）に住んでいる人々の苗字の分布を、バリオを構成するマンサーナ（manzana 街区、ブロック）ごとに記入してある。まだ GPS 機能を持つ携帯電話がなかった時代だったので、Google Earth の画像をもとにした地図が頼りだった。

さて、「ヌンキニ村」である。まずはこの村の来歴から始めねば、話は進まない。先スペイン期から存在したこの集落は、16 世紀半ばに始まる集住政策により、村人は近くのカルキニ村へ強制的に移動させられ、バリオ（地区）を形成してそこに住むことになる。しかし、16 世紀末に、おそらく 1582 年から 1595 年までの間に、元々彼らが住んでいた場所に再配置されて今に至っている。1633 年には教会が建立されていて、カルキニにある教区教会のビシータ（visita 常住司祭がおらず、この場合はカルキニの教区司祭が巡回してミサなどをあげに来る）となっている。この教会がある場所は、以前にも書いたが小高くなっており、その下に先スペイン期のかなり大きな建物があったであろうことは、使用されている石材にその部材が多くみられることからも間違いない。**（写真 2）**

住民に聞けば、半世紀前くらいには、中央広場に面していくつかの先スペイン期の建物跡があったそうだ。

この村に関して米国人研究者ラルフ・L・ロイズ（Ralph L. Roys）は、『ユカタン・マヤ族の政治



地図１　ヌンキニ村の祈祷所（oratorio 青十字印）、井戸（二重丸印）、各地区に住む人々の苗字
（Google Earth をもとに筆者作成 ©Tsubasa Okoshi）



写真２　ヌンキニ村の教会の鐘楼近く。四角い大きな切石のほとんどは先スペイン期の建物からとってきたものだ
（2024 年 8 月 26 日筆者撮影　©Tsubasa Okoshi）

地理（The Political Geography of the Yucatan Maya）』と題する 1957 年に出版された本の第 21 頁で、村内には次の 6 つのバリオがあると記している。クルスチェン（Cruzch'en）、チャルトゥンチェン（Chaltunch'en）、チョッチハ（Ch'och'ha）、チェンテル（Ch'enthel）、サン・ロマン（San Román）、カンカブチェン（Kancabch'en）、がそれだ。「チェン」は、マヤ語で井戸、泉を、「ハ」は水を意味する言葉だから、6 つの名称のうち 5 つが井戸、あるいは大きく「水場」に関係するものであることは重要な意味を持っている。私の調査では、現在これらの名称は「井戸の名前」として人々に記憶されているので、ロイズは「特定の井戸を使って生活を築いている人々が住む地域」と人が説明したものを「バリオ」と認識したはずだし、それは人々の「地縁関係」を認識する媒体になっていたと考えていいだろう。

これに関して、ヌンキニ村を語る際に忘れてはならない「人文地理」がある。ドン・ニーショによれば、この村は、ほぼ中央を東西に横切る道路によって、北と南に分けられる。北側は比較的新しく形成された地域で、教員や商業従事者が住み、外部から来た人たちが占める割合が多いのだという。一方、南部では圧倒的に農業に従事する人が多く住んでいる。この区分は、墓地の使用にも表れており、北の地域に住む人々は街外れにある北の墓地に、南に住む人々は南の墓地へ埋葬される。つまり、生と死にまつわる空間まで異なるという面白い現実を村人は生きている。さらに興味深いのは、ドン・ニーショ自身、自分も住む南の地域は熱心に案内して回ったが、北の地域にはあまり行きたがらず、挨拶はするものの居心地がどことなく悪そうで、雄弁に語ることがなかった。「北と南」は、単に成立年代・過程や住民の職業が違うということ以上に、私たち外のものからは伺え

ない精神的、心理的な「何らかの」違いがあるらしい。「たかが一村落」だと思うことなかれ。その内部世界は奥深いのだ。

さて、古井戸である。地図を見れば一目瞭然だが、その多くは、村の東西を貫く道路より南側の、古くから人々が暮らしてきた区域に分布していることに気づく。中でも、村の南東部に位置するガト・ネグロ（Gato Negro「黒い猫」の意味）と呼ばれるバリオが最も古いとされており、その西側のサン・イシドロ（San Isidro）地区とともに一番多くの井戸が分布しているのだ。ちなみに、現在の村は、人口増加に伴いさらに広い範囲に拡大しているが、そこにはほとんど井戸は作られていない。最初から水道が完備しているから必要ないのだ。だから、井戸の分布は、かつての居住域の輪郭をおぼろげながら浮かび上がらせてくれるのである。

先スペイン期の、発掘に基づいた具体的な居住形態や建物群の広がりについては、考古学的調査に待たねばならないが、この井戸の分布地図や、村内に散見する先スペイン期の遺構や聞き取り調査から得られたデータをもとにすると、植民地時代初期におけるこの村の建設のされ方は次のように復元することができそうだ。

集住政策によって一時期カルキニに住まわされた人々は、上に述べたように 16 世紀末にこの地に戻り、最初にあてがわれた土地が、彼らの歴史記憶にあるように今のガト・ネグロ地区に相当する地域だったと思われる。これには理由がある。スペイン人がこの地に進出してきてからまだ半世紀も経っていない時のことだから、村の中央にはピラミッドがあったはずだし、これに付随した建物群はその西側の南北に広がる地帯に分布していた。このピラミッドを破壊し、その石材を使って教会を建築することは、プエブロ・デ・インディオス（pueblo de indios 植民地時代の先住民村）建設では当然のことのように、多くのスペイン領アメリカで行われた。これは、「偶像崇拝」をしていた先住民をキリスト教に導き、「文明化」したことの証として必要な手続きであったが、同時にまた、「聖なるものは受け継がれる」の例え通り、先住民にとっての最重要の場所、ピラミッドがある所に教会を建てることで、聖なる場所は、今度は「新しい宗教」に受け継がれることになったのである。**（写真 3）**



写真 3　ヌンキニ村サン・ディエゴ・デ・アルカラ教会。道路面から 1.5 メートルほど高い場所に建てられていることに注意。
（2024 年 8 月 26 日筆者撮影 ©Tsubasa Okoshi）

しかし、破壊されずにまだ残っている、他の建物群のある場所に彼らを住まわせるわけにはいかない。「昔（異教の神々を崇めていた時代）を思い出させないため」である。かといって、布教の都合上人々がそこから離れすぎた場所にいても困る。だから、最初は先スペイン期の建物がない、しかしそこに近い場所が選ばれて先住民村落が造られるのが常であった。そこで選ばれたのがガト・ネグロの地区がある場所ではなかったか。

その後、その西に広がる建物群を破壊していき、そこにも村人が住むようになった。これが今のサン・イシドロ地区なのであり、ここには実際他のどこよりも先スペイン期の建物の遺構や、使われていたかなり大きな石材を一般の人々の家の敷地に見ることができるのだ。**（写真 4）**



写真 4　サン・イシドロ地区の民家の敷地に置かれている、先スペイン期建造物の部材　古典期後期の宮殿形式の建物があったことを示している
（2024 年 8 月 28 日筆者撮影　©Tsubasa Okoshi）

もっとも、これらが短期間のうちに進行したわけではもちろんない。そもそもカルキニですら、碁盤の目状に道路が作られたのは、集住政策が開始されてからなんと 27 年も経った、1579 年のことで、3 年の歳月を要したと『カルキニ文書（Códice de Calkiní）』は述べている。だから、マンサーナ、つまり道路によって囲まれた街区が出来上がり、その中にある先スペイン期の建物が少しずつ取り壊されていく過程は緩慢なものであり、人口が少しずつ増えていく 17 世紀に入ってすら、人々は村における自分の空間を継続的に整えていたのだと考えている。その中に「井戸」の問題がある。

考古学者の友人は掘削年代の特定は難しいと述べたが、私は歴史的に見て、井戸の必要性が植民地政府のみならず、先住民にとっても意識されるようになったのは、おそらく 17 世紀半ば辺りからであり、必要性に迫られた結果、あちこちの村で掘られ始めたのではないかと考えている。これを促したのは、1640 年代後半から 1650 年代にかけて、ユカタン半島の広い範囲で水不足・飢饉・疫病、それに伴うモンテ（森、ジャングル）への逃散が繰り返されたからだ。そこで、植民地政府はこれを抑制し、日常レベルはもちろん、災害時にも人々の生活用水を確保するための井戸の掘削を考え、これを実行させたと思われる。集住によって人々を村へ移すことは、先住民の改宗と貢納の取り立てに関しては合理的な施策ではあったが、マヤ人の「定住」を恒久的なものとすることはできなかった。災害に見舞われたときに、とりわけ旱魃の際に、マヤ人は水と食料を求めて必ずモンテへ移動してしまう。植民地当局にしてみれば、これはできる限り避けたい現象だった。頻繁に襲ってくる旱魃に耐えられる社会にする方法の一つが、村の内部あるいはその周辺に安定した水源を確保することだった。各地で井戸が盛んに掘られるようになるのは、こうした経験を重ねて生まれた方策だったのではないか。

井戸が掘られた年代を推定するのは考古学的には困難だし、その掘削に関する資料もほとんど見当たらない。唯一最近見つけたのは、『タビ文書（Documentos de tierras de la Hacienda San Juan Bautista Tabí）』に収められている、1786 年 3 月 30 日の日付を持つ文書だ。この中で、サバクチェ（Sabacché）の人々は、自分たちの井戸を売却したと書いてある。この井戸は 30 メートル余の深さをもつもので、この年よりもはるかに前に掘られたものだと文書は記している（294r）。となれば、この井戸は 18 世紀初頭、あるいはそれ以前に掘られた可能性がある。それは、ユカタン地域が虫害や飢饉、旱魃に長期にわたって襲われ、苦しんでいた頃でもある。サバクチェの場合も、生活を脅かしていた災害から村人を守る必要性に駆られて井戸が掘られた可能性を考えねばならないだろう。

では、井戸を掘削することで、先住民人口を村に固定することができたかというと、実はそうでもなかった。確かに、恒常的に村を単位として生活用水を確保できる利点は大きかった。しかし、井戸を掘ったからといって、人々がモンテへ居を移さなくなったわけではない。実際、18 世紀後半に旱魃と飢饉が襲うと、人々はなおモンテへ移動し、そこにある資源を利用して生き延びていたのである。井戸は水を与えてくれた。しかし、食べ物まで与えてくれるわけではなかったからだ。そして食べ物は、スペイン人による支配が始まる遥かな以前から、モンテにあったのである。

これに関する興味深い史料がある。ラルフ・ロイズが英語に翻訳・編集した『エブトゥン村土地関係文書（The Titles of Ebtun）』である）。この中の文書番号 192 の史料によれば、1769 年頃、大飢饉に見舞われたエブトゥン村で、パスクアラ・チ（Pascuala Chi）という女性が父から受け継いだモンテを売ろうとして村の有力者を探したところ、すでに死んでいるか餓死寸前で、残る人々も野生の果実を食べて生き延びるためモンテへ移っていたという （Roys 1939:54, 289-291）。井戸などを通して水を確保できても、食料がなければ人は村に留まれなかったのである。ただし、人々がそのままモンテに留まり続けたわけではない。災害が落ち着けば、また村に戻っていったと考えて間違いない。つまり、村に「住む」ことと、モンテへ「出る」ことは、全く相反する行為ではなかったのである。

ここで、ヌンキニの地図をもう一度見てみよう。そこには井戸だけでなく、それぞれのマンサーナに住んでいた人々の姓も書き込んであったからである。そもそもバリオの構成単位であるマンサー

ナを単位とする区画に住んでいる人々の姓を調べる気になったのは、1583 年に巡察吏ディエゴ・ガルシア・パラシオ（Diego García Palacio）が調査・作成したいくつかの村々の貢納台帳を調べた際に、首長・村長（cacique-gobernador）の家族数が、他と比較しても群を抜いて多く、彼らは少なくとも同じマンサーナ、時には隣接する複数のマンサーナに分かれて居住していた可能性を示していることを覚えていたからだ。それを実地に調査してみたかった。

ここで筆者言う。先ほどマンサーナを「街区、ブロック」と訳し、バリオの構成単位であると述べた。我が国ではあまり使わない概念なので、少し寄り道してこのことを説明しておきたい。マンサーナは、街路で囲まれた区画だと考えていい。地図 1 を見ていただければわかるように、正方形であることは少なく、多少歪な形をしている場合も多い。ヌンキニの場合、村の南半分にある街区をもとに計測してみると、一辺は 150 メートルから 200 メートルと、かなりの幅を持つ四角形となっている。この中で、人々はそれぞれ通りに面して家屋を建て、その後ろ側に多くの果樹を植えたり、菜園があったり、豚や鶏を飼育したりする空間がある。これを上空から見れば、道路に囲まれた街区は、中央部分が果樹などで森のようにみえるのだ。写真は、現在のユカタン州の州都メリダ市の西にある、植民地時代には港町であるシサルとメリダ市を結ぶ重要な商業拠点であったフヌクマ（Hunucmá）町を、メリダ空港を発ってメキシコ市へ向かう飛行機の窓から写したものだが、街区の中央部に「森」のように茂る木々が見てとれるだろう。これこそが、ユカタン地域の典型的なマンサーナ、街区なのである。**（写真 5）**

話を元に戻そう。かつては選挙管理委員も務めていたというドン・ニーショは、家ごとに「ここは誰それの家です」と、家主の姓名を教えてくれる。その記憶力には驚嘆した。宿に帰って、それをいちいち地図に記入していく。そこからわかったのは、同じ姓を持つ家族が村全体に散らばっているのではなく、マンサーナごとにまとまって住んでいる傾向があることだった。ドン・ニーショによれば、村の人口が拡大するとともにマンサーナの数も増え、そのような場所では様々な姓の家族が混じって住んでいるとのことだったが、古いマンサーナでは、同じ姓を持つ、別の言葉で言えば同じリネージに属する家族群が住んでいるのだそうだ。これは、先スペイン期に起源を持つ居住形態に基づいている可能性が高い。集住政策を指揮したフランシスコ会修道士らも、マヤ人たちが持っているこの社会・親族組織をバラバラにしてしまうことは、彼らの社会を完全に破壊することになり、その結果が予測できないだけに慎重にこれを温存していくことを選択せざるを得なかったと思われる。上に挙げた、巡察吏の報告書は、その結果をよく示しているのだ。



写真 5　上空から見たフヌクマ（Hunucmá）町。道路の両脇に家屋が並び、街区の中央が木々に覆われている様子が見える
（2024 年 11 月 2 日撮影　©Tsubasa Okoshi）

さて、井戸の調査は、単にその場所を地図上に記録するにとどまらない。一つの井戸に対して何家族が依存していたかについても聞いて回った。その結果、一つの井戸を四、五家族が共同で利用していたこともわかってきた。ただし、ここでいう「家族」を、日本のそれと同じようにイメージしてはならない。日本の場合は核家族が単位となるが、マヤ社会では親子 3 代ほどにわたり、しかも拡大家族だから人数は多いのだ。それが、井戸を共同で使っている。井戸の位置から見れば、マンサーナの中にあるものは少ないから、複数のマンサーナの人々が同じ井戸を使うことになる。そしてこれは今日友人から聞いたことだが、井戸は誰もが使える、いわば社会に開かれた公共財であり、通常は井戸の近くのグループのみが使用するものらしい。むろん、やむを得ぬ事情がある場合

には離れた井戸へ行き、許可を乞えば使用できるとのことだ。だから、井戸は、明らかに社会的な財として、人々の紐帯を強めていく役割を果たしたのだ。

今、私はツィットバルチェで、これを書いている。ドン・ニーショにもこの内容についてはさらに話を伺っている。前号でも書いたが、何か疑問が浮かんだときに、すぐに聞きに行ける人々がいて、豊かな回答を得ることができるのは野外調査の醍醐味だろう。明日からは、ツィットバルチェでマンサーナごとの住人たちの姓の分布調査をするつもりだ。それを次号では語ることになるかもしれない。今度はどんなことを学ぶことになるのか、明日からの調査が楽しみだ。

参考文献

Okoshi Harada, Tsubasa
2009 *Códice de Calkiní*. Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Ortiz Yam, Inés, and Sergio Quezada (eds。)
2009 *Visita de Diego García de Palacio a Yucatán, 1583*. Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Roys, Ralph L.
1939 *The Titles of Ebtun*. Carnegie Institution of Washington Publication 505. Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.
1957 *The Political Geography of the Yucatan Maya*. Carnegie Institution of Washington Publication 613. Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.

"Documentos de Tierras de la Hacienda San Juan Bautista Tabí"
1569–1821 Manuscript collection, 5 vols. Latin American Library, Tulane University, New Orleans.

（本学教授／IEAK 研究員）

連載：ラテンアメリカから米国への人の移動を考える（16）
―― ベネズエラ震災からの復興と国内外への人の移動の可能性 ――

牛島　万

ベネズエラでは、2026 年 1 月 3 日に実行された米軍の軍事介入によってニコラス・マドゥロ大統領が拘束されて以降、デルシー・ロドリゲス暫定政権が国家再建に取り組んできた。しかし、その途上でさらなる試練が訪れた。2026 年 6 月 24 日、マグニチュード 7.2 および 7.5 の二度の大地震がベネズエラ北部を襲い、首都カラカス、カリブ海沿岸部のラ・グアイラ州、そして震源地周辺のヤラクイ州を中心に甚大な被害をもたらした。これは同国にとっておよそ 100 年ぶりの最悪の自然災害となった。

政府発表によれば、7 月 22 日時点で死者は 5,398 人、負傷者は 1 万 6,740 人、住居を失った震災被害者は 1 万 7,907 人に達した。その後も被害の全容把握が進み、8 月 3 日までには死者数が 6,125 人、病院で診療、治療を受けた人が 60,992 人を超えたとの情報も伝えられている。

7 月 22 日時点では、107 ヶ所の仮設キャンプに 2 万 3,335 人が避難しており、その総収容能力に迫る状況となっている。当局は 12 万 8,324 世帯の被災家族に対して支援を実施した。さらに、856 棟以上の建物が損壊し、そのうち 190 棟が完全に倒壊した。地震後には 1,500 回を超える余震が記録されている。

医療面では、医療チームが 4 万 4,298 人の患者を治療したほか、被災地には 4,455 万 7,208 リットルの飲料水と 1,096 万 4,199 トンの食料が供給された。救援活動には 3 万 989 人の要員が動員され、国際社会からも 2,278 人の救助隊員と 3 万 1,745 人のボランティアが支援に参加している。

こうした状況の中、カラカスのフエルテ・ティウナ軍事施設では、デルシー・ロドリゲス暫定大統領とホルヘ・ロドリゲス国会議長によって式典が行われ、240 世帯以上が新たな住居を受け取った。ロドリゲス暫定大統領は、インフラや住宅の再建だけでなく、教育や雇用を重視した人道的復興が必要であると強調し、国民に対して希望を失わないよう呼びかけた。

国連世界食糧計画（WFP）は、すでに 10 万人以上の被災者に対する支援を完了しており、今後 2 ヶ月以内に支援対象者を 50 万人規模まで拡大できる見通しを示している。同機関は、発災後 72 時間以内に 7 州 80 以上のコミュニティで被害調査を実施し、地方自治体や人道支援団体と連携して支援活動を展開した。

支援内容は被災世帯の状況に応じて調整されており、避難所や共同炊事場では温かい食事を提供し、避難民には即食可能な食料を配布している。また、自炊が可能な世帯には食料バスケットを、市場機能が維持されている地域ではデジタルクーポンを配布している。WFP は今後 2 ヶ月間の支援継続のために 8,000 万ドルの資金が必要であると訴えている。一方、専門家は復興に必要な総費用を 120 億ドル以上と見積もっており、これはベネズエラ GDP の約 10.9％に相当する。

ここで重要なのは、復興政策そのものが現ロドリゲス政権の命運を左右する政治的要因になり得るという点である。現時点では、ロドリゲス暫定政権は復旧・復興に全力を尽くしているように見える。しかし一方で政権への批判も少なくない。被災地では大量のがれきが依然として放置されており、その撤去率は 16.5％（8 月 3 日現在）にとどまっているとされる。この復旧の遅れが暫定政権への支持率低下を招いているとの指摘もある。

こうした中、8 月にはスペインへ亡命している元国会議長で野党指導者のディノラ・フィゲラとロドリゲス暫定大統領との協議が開催された。この対話は、政権移行や総選挙実施への布石となるのかが注目されている。協議の主要議題の一つには震災復興政策が含まれており、その仲介には米国政府やマルコ・ルビオ国務長官の関与があるとされている。

ロドリゲス暫定政権が直面する課題は震災被害だけではない。マドゥロ政権下で蓄積された構造

的問題も引き継いでいる。その代表例が人的インフラの脆弱化である。

ベネズエラは近年、ラテンアメリカ史上最大規模ともいわれる移民危機を経験してきた。震災以前から、経済崩壊、ハイパーインフレ、生活必需品不足、政治的不安定を背景として 700 万から 800 万人の国民が国外へ流出していた。この大規模な人口流出は深刻な頭脳流出を伴い、医師、看護師、消防士、エンジニアなど専門職の不足を招いた。その結果、今回の大震災への対応能力は大きく制約されている。カラカス首都圏で実際に稼働している救急車はわずか数台に過ぎないとの報告もあり、仮にこれが事実であれば、危機対応能力の深刻な低下を示している。

ここで注目されるのが、震災が新たな人口移動を引き起こす可能性である。国際移住機関（IOM）の初期推計によれば、最大 676 万人が地震の影響を受ける可能性があり、カラカスだけでも最大 200 万人が国内外への移動を余儀なくされる可能性があるという。

震災を契機とする国際移住や難民化の背景には、単なる住宅損壊だけではなく、中長期的な生活基盤の崩壊が存在する。住居に加え、水道、電気、ガス、通信などのライフラインの復旧が長期化すれば、人々は生活再建の見通しを失う。また、地域産業が打撃を受け雇用機会が失われた場合、多くの人々が職を求めて移動することになるだろう。

国内での再建が困難と判断されれば、海外への出稼ぎや移住が現実的な選択肢となる。さらに、医療サービスの機能低下、治安悪化、政府による受け入れ体制の不足が重なれば、既に国外に形成されているベネズエラ人ディアスポラを頼った移住の動きが活発化する可能性が高い。

震災と移民問題が交錯した象徴的な事例として、6 月 24 日の地震発生直前または当日に米国から強制送還された約 146 人のベネズエラ人の問題がある。報道によれば、その多くが倒壊したホテルに閉じ込められ死亡したとされる。遺族は、彼らがまず厳格な移民政策の影響を受け、その直後に自然災害に巻き込まれたと証言している。人権団体は強制送還政策の見直しとともに、自然災害発生時における一時保護資格（TPS）の適用を求めている。

もっとも、周辺諸国の受け入れ能力にも限界が見え始めている。コロンビアは世界最大のベネズエラ難民受け入れ国であり、すでに 2025 年 5 月時点で約 281 万人を受け入れている。しかし、2026 年上半期だけでも国内武装勢力との紛争によって約 1 万 6,000 人の国内避難民が発生しており、自国の治安維持と人道支援を優先せざるを得ない状況にある。

コロンビア政府はベネズエラ震災に対し、60 人以上の救助隊員と捜索犬を派遣し、野戦病院の設置や食料・医薬品の提供など積極的な支援を行っている。しかし現時点では、今回の震災を理由とする新たな難民認定制度は導入されておらず、国境管理も厳格に維持されていると考えられる。

ペルーは、コロンビアに次ぐベネズエラ人の主要な受入れ国である。2026 年時点で、国内には約 163 万人のベネズエラ出身の難民・移民が居住しており、人口比では約 20 人に 1 人がベネズエラ人に当たる。難民認定を求める庇護申請者は 50 万人を超えるものの、審査の長期化が課題となっており、認定を受けられる人数は限定的である。

一方、メキシコは COMAR（メキシコ難民支援委員会）を通じて難民制度を維持している。迫害や広範な暴力、人権侵害を理由として帰国を恐れる者は亡命を申請することが可能である。UNHCR によれば、2025 年には 7 万 500 人以上がメキシコに亡命を申請しており、そのうち 20％をベネズエラ人が占めている。

米国の移民政策厳格化により、メキシコは従来の通過国から移住先へと変化しつつある。しかし、現時点で震災被災者向けの特別な受け入れ制度は存在しない。したがって、ベネズエラ人が保護を求める場合には、既存の亡命制度または人道的保護制度を利用する必要がある。

ブラジルは、コロンビアやペルーと並ぶベネズエラ人の主要な受入れ国である。2018 年以降、ブラジル政府は「オペラソン・アコリダ（Operação Acolhida）」と呼ばれる連邦主導の人道支援プログラムを展開し、ロライマ州国境から入国するベネズエラ人の受入れと社会統合を進めてきた。同プログラムは、国境管理、一時的な住居の提供、ならびに就労・定住を促進するため

の国内他地域への自主的移住支援を三本柱としている。2026年6月現在、ブラジルには15万1,817人のベネズエラ難民と66万1,566人のベネズエラ人居住許可保持者が居住しており、南米における重要な受入れ拠点となっている。

以上みてきたように、ベネズエラの震災は単なる自然災害ではなく、政治移行期にある国家が抱える構造的問題を浮き彫りにした複合危機である。復興の成否は被災地域の再建だけでなく、ロドリゲス暫定政権の政治的正当性、さらには今後の民主化プロセスそのものにも大きな影響を与える可能性がある。

同時に、震災は人口移動の新たな引き金となる可能性を秘めている。国内避難にとどまらず、国外移住や難民化が進展するかどうかは、今後のベネズエラの復興速度、雇用創出、治安維持、そして国際社会による支援の規模に大きく左右されるであろう。ベネズエラの復興問題は、人道支援と民主化、そして国際移民政策が交差する21世紀型の複合的課題として注目されるべきである。

参考文献

ACNUR Brasil, “Oito anos da Operação Acolhida em oito perguntas, fatos e curiosidades.” https://www.acnur.org/br/noticias/notas-informativas/oito-anos-da-operacao-acolhida-no-brasil

Arcadia, “De la huida económica al desplazamiento por sismos: Terremotos en Venezuela agrava la mayor crisis migratoria de América Latina,” 9 de julio de 2026. https://arcadiafoundation.org/de-la-huida-economica-al-desplazamiento-por-sismos-terremotos-en-venezuela-agrava-la-mayor-crisis-migratoria-de-america-latina/

Artículo 66, “Diálogo político en Venezuela arranca con <primera reunión presencial> la <próxima semana>,” 1 de agosto de 2026. https://www.articulo66.com/2026/08/01/dialogo-politico-venezuela-gobierno-delcy-rodriguez-oposicion-reunion/

France 24, “Colombia: conflicto armado dejó 80.000 desplazados y confinados en los primeros seis meses de 2026,” 23 de julio de 2026. https://www.france24.com/es/am%C3%A9rica-latina/20260723-colombia-conflicto-armado-dej%C3%B3-80-000-desplazados-y-confinados-en-los-primeros-seis-meses-de-2026

国連UNHCR協会、「中南米最大の避難 ― ベネズエラ危機 非紛争国としては世界最大の人口流出」https://www.japanforunhcr.org/appeal/VZLA

ロイター、「アングル：ベネズエラ大地震、救助復興対応がロドリゲス暫定政権の命運左右」https://jp.reuters.com/economy/ZYPDX2MP4NKFRAOJCZ3NGVBOJI-2026-06-29/?rpc=122

その他、新聞記事等をインターネット上で参照したが、紙面の関係上、その全ての引用元のサイトの掲示は省略する。

（本学教授／ELAK研究員）

新任 IELAK 研究員・研究紹介

アメリカの対ラテンアメリカ外交と CIA

大野　直樹

2026 年度より IELAK の研究員となりました英米語学科の大野直樹です。私の専門は、冷戦期のアメリカ外交史研究です。なかでも中央情報局（CIA）の情報分析官に強い関心をもち、彼らが国際情勢をどのように評価し、その知見が外交政策にどのような影響を与えたのか、あるいは与えなかったのかについて、公開された公文書に基づく実証研究を続けてきました。具体的には、1940 年代から 50 年代にかけての対ソ戦略の策定過程、ベトナム戦争における戦況分析、1958 年の第二次台湾海峡危機をめぐる情勢分析などを研究対象としてきました。概して、学者肌の分析官たちは専門知に基づいて冷静な情勢分析を行おうとしますが、多様な利害や思惑が交錯する現実の政治の世界では、彼らの認識がそのまま受け入れられるとは限りません。そうした分析官たちの営みに関心を抱きながら、公文書の分析を続けています。また近年では、CIA のような秘密情報機関の存在を民主主義の原則といかに両立させるのかという問題にも関心を広げ、議会による CIA の民主的統制に関する研究にも取り組んでいます。

このような研究上のバックグラウンドをもつ私にとって、2021 年 4 月に本学へ着任するまで、ラテンアメリカ研究との接点はほとんどありませんでした。アメリカの対ラテンアメリカ外交という新たな研究領域へ踏み出す契機を与えてくださったのは、住田育法先生と牛島万先生でした。お二人のお声がけにより、2021 年 11 月に開催された IELAK 第 21 回ラテンアメリカ研究講座で報告する機会を得ました。当時の私がラテンアメリカに接近するうえで依拠できたのは、CIA 研究という自身の専門だけでした。そこで取り上げたのが、「アメリカの冷戦戦略と CIA の秘密工作活動　グアテマラ・アルベンス政権打倒工作への道程」というテーマです。この報告をもとに執筆した論考は、住田育法・牛島万編著『南北アメリカ研究の課題と展望　米国の普遍的価値観とマイノリティをめぐる論点』（明石書店、2023 年）に収録されています。

この研究では、1954 年に CIA の秘密工作によって、民主的手続きを経て選出されたグアテマラのハコボ・アルベンス大統領が辞任に追い込まれた事件を取り上げました。アメリカの対ソ封じ込め政策の提唱者として知られる外交官ジョージ・ケナンは、冷戦を戦い抜くうえでアメリカが自らの普遍的価値観を守ることの重要性を説いていました。しかしその一方で、ケナンは CIA による秘密工作活動を積極的に支持した主要な論者の一人でもありました。本研究では、そうしたケナンに見られる矛盾が、1950 年代の国際情勢およびアメリカ国内政治のなかで次第に拡大し、最終的にアルベンス政権打倒工作へとつながっていく過程を論じました。

2022 年 12 月には、IELAK 主催討論会「ラテンアメリカ政治のいま、そしてこれから」に登壇し、「米中対立とラテンアメリカ」と題する報告を行いました。当時のバイデン政権は、ベネズエラやキューバといった反米諸国に対する制裁の緩和を模索しており、両国との関係を有するブラジルのルーラ政権が仲介役を果たし得る可能性を指摘しました。しかし、周知の通り、本年 1 月にはトランプ政権がベネズエラのマドゥロ大統領を拘束するという事件があり、状況は一変しています。歴史研究を専門とする私にとって、同時代の国際政治を論じることは専門領域をやや超えた挑戦でもありましたが、現在進行形の国際情勢を分析することの難しさと重要性を改めて実感する機会となりました。

さらに 2025 年 3 月には、学内競争的資金の助成を受けた研究会の合同報告会において、「1970 年代の南米軍事政権とアメリカの共謀―コンドル作戦に関する研究動向―」と題する報告を行いました。コンドル作戦とは、チリ、アルゼンチン、

ウルグアイ、パラグアイ、ボリビアなどの軍事政権が、左派反体制派を弾圧するために構築した国際的な協力体制です。反体制派が自国での弾圧を逃れて近隣諸国へ逃亡したとしても、その国がコンドル作戦の参加国であれば監視や拘束の対象となり得るという越境的な性格を有していました。アメリカがコンドル作戦を主導したわけではありませんが、少なくともその存在を認識していたこと、さらに作戦を担った各国軍人とアメリカ軍との間に人的ネットワークが存在していたことが明らかになっています。報告では、CIA をはじめとするアメリカ政府機関の文書公開が進展したことにより、従来考えられていた以上にアメリカがコンドル作戦の実態を把握していたことが明らかになりつつあるという近年の研究動向を紹介しました。

日本人のアメリカ外交史研究者のなかで、対ラテンアメリカ外交を専門とする研究者は決して多くありません。また、日本のアメリカ外交史研究において CIA は比較的周辺的な研究対象です。しかし、アメリカ外交を考えるうえでラテンアメリカ諸国が極めて重要な存在であることは言うまでもなく、両者の関係を理解するうえで CIA の役割を無視することはできません。現時点ではまだ散発的な研究成果を積み重ねている段階ではありますが、CIA 研究で培ってきた知見を活かしながら、アメリカとラテンアメリカの関係を歴史的視点から考察していきたいと考えています。そして、その成果を通じて IELAK の研究活動に少しでも貢献できれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。



研究室にて

（本学准教授／IELAK 研究員）

新任 IELAK 研究員・研究紹介

異文化接触史における「語ること」と「沈黙すること」
― フロイスから遠藤周作『沈黙』の映画化まで ―

アイシュワリヤ・スガンディ

2026 年度より、IELAK の研究員に加えていただくこととなった。専門は 16 ～ 17 世紀のイエズス会史およびグローバルヒストリーであり、日本宣教を中心に東西文化交流と異文化接触の歴史を研究している。インド出身であることから、ポルトガル領ゴアをはじめとするインド西海岸は、研究関心を形成する重要な歴史空間の一つとなってきた。 ゴアは、日本宣教へ向かうイエズス会士たちの重要な拠点であるとともに、アジアとヨーロッパを結ぶ文化交流の結節点でもあり、私の研究において重要な位置を占めている。

IELAK では、ラテンアメリカという新たな視点を取り入れることで、イエズス会が築いたグローバルなネットワークをより包括的に捉え、異文化交流史の新たな可能性を探究していきたいと考えている。また、IELAK に集う多様な専門分野の研究者との交流を通じて研究を深化させ、その成果を教育・研究の双方へ還元していきたい。今後ともご指導、ご鞭撻を賜れれば幸いである。

異文化との接触を記録するという営みは、対象をありのままに写し取る透明な作業ではありえない。何を語り、何を語らずに済ませるかという選択そのものが、語り手の文化的･宗教的立場によって規定されるからである。本稿では、この視点か

ら十六世紀のイエズス会士による日本記述と、遠藤周作『沈黙』およびその映画化作品を一つの分析枠組みのもとで考察する。主要概念は「翻訳不能性」「語り手の位置性」「意図的な沈黙」である。

ルイス・フロイス（1532－1597）の『日本史』は、戦国期日本を知る第一級の一次史料として高い価値を有する。しかし、その記述は決して中立的ではない。『欧日比較文化論』では 600 項目以上にわたりヨーロッパと日本の習慣が対比されるが、その比較はヨーロッパを暗黙の基準とし、日本を「異なるもの」として位置づける構造を持つ。フロイスは日本を客観的に描写したのではなく、キリスト教的世界理解を通して日本を解釈したのである。

この翻訳不能性を象徴するのが、「デウス（Deus）」を「大日」と訳した問題である。ザビエルは布教初期に「大日」を神の訳語として採用したが、大日は密教における大日如来を指し、人格神とは根本的に異なる概念であった。この誤訳は単なる言語の問題ではなく、異なる宗教体系の間で意味そのものが一致しないことを示している。George Elison（1973）が論じるように、近世日本におけるキリスト教受容は相互の意味変換を伴う過程であり、フロイスの記述もまた、そのような文化的翻訳の産物として理解すべきである。

一方、この非対称性は逆方向にも認められる。東インド巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノが企画した天正遣欧使節の成果として刊行された『デ・サンデ天正遣欧使節記（*De Missione*）』は、使節の体験をもとにドゥアルテ・デ・サンデが著し、ヴァリニャーノが監修した対話体作品である。Pelliccia（2022）が指摘するように、本書は単なる旅行記ではなく、日本人に理想化されたカトリック・ヨーロッパ像を提示するための文化的表象であった。そこでは宗教改革や政治的騒乱、聖職者の不祥事は意図的に語られず、都市礼賛（*laudes civitatum*）という修辞のもとで秩序ある世界が描かれる。フロイスが日本人の宗教的自己理解を十分に語らなかったように、ヴァリニャーノもまたヨーロッパの内部矛盾を沈黙させたのである。両者は方向こそ異なるものの、「何を語り、何を語らないか」という選択を通して世界を再構成するという同一の構造を共有している。

この構造は遠藤周作『沈黙』（1966 年）にも継承される。山根道公（2005）が述べるように、遠藤文学の根底には「日本という泥沼にキリスト教は根付くのか」という問いが存在する。翻訳不能性はフロイスやヴァリニャーノにとって宣教上の実践的課題であったのに対し、遠藤にとっては信仰そのものを問い直す実存的課題であった。作品は書簡体から第三者の叙述、さらに幕府側記録へと視点を移行させ、「誰が語るのか」という問題を作品構造そのものに組み込んでいる。

この歴史の再構成は、映画化によってさらに明瞭になる。篠田正浩版（1971 年）は江戸幕府の統治機構と制度的暴力を前景化し、「沈黙」を国家権力によって奪われた声として描く。一方、マーティン・スコセッシ版（2016 年）はロドリゴの内面的葛藤と神との対話を中心に据え、「沈黙」を信仰の問題として表現する。同じ歴史的素材であっても、語り手の立場や文化的背景が異なれば、その意味は大きく変容するのである。

以上のように、フロイス、ヴァリニャーノ、遠藤周作、篠田正浩、スコセッシの五者に共通するのは、「何を語り、何を沈黙させるか」という選択が、それぞれの歴史的・文化的立場によって規定されている点である。歴史資料は文学へ、文学は映画へと媒体を移すたびに、新たな語り手によって再解釈され、新たな意味を与えられる。本稿の独自性は、フロイスとヴァリニャーノの一次史料を、遠藤周作『沈黙』および二つの映画化作品と同じ「語り手の位置性」という視点から連続的に考察し、ヴァリニャーノをフロイスの「逆方向の鏡」として位置づけた点にある。この視座は、異文化接触史を「語ること」と「沈黙すること」の相互作用として捉え直す可能性を示すものであり、比較宣教史、比較文学、翻訳研究へも応用可能な分析枠組みとなるだろう。

参考文献

Elison, George.
1973　*Deus Destroyed: The Image of Christianity in Early Modern Japan*. Harvard University Press.

Pelliccia, Carlo.
2022　“Representing Catholic Europe: Alessandro

Valignano and *De Missione* (1590)." *CECIL* 8: 1-20.

遠藤周作
1966 年　『沈黙』新潮社。

高橋裕史
2006 年　『イエズス会の世界戦略』講談社。

フロイス、ルイス（岡田章雄訳）
1991 年　『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波文庫。

フロイス、ルイス（松田毅一・川崎桃太訳）
1977-1980 年　『日本史』全 12 巻、中央公論社。

山根道公
2005 年　『遠藤周作―その人生と「沈黙」の真実』朝文社。

（本学准教授／IELAK 研究員）

新任 IELAK 研究員・研究紹介

軍事思想の国際交流――20 世紀転換期に注目して

布施　将夫

京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター（IELAK）と筆者の関係は、研究員に着任した 2026 年度から 3 年前に遡る。IELAK にご所属の先生方と一緒に、共著の本『南北アメリカ研究の課題と展望　米国の普遍的価値観とマイノリティをめぐる論点』（住田育法・牛島万編著、明石書店、2023 年 3 月）を書かせていただいたからである。このたび改めて、先生方と同じグループに参加させていただけることになり、大変光栄に思っている。以下では、最近の研究活動を簡潔に紹介したい。



**［スタンフォード大学のフーバータワー遠景
史料収集の合間に布施撮影］**

昨年度の 2025 年 11 月に『アメリカが創る世界、世界が創るアメリカ――アメリカ史の新地平』（中野耕太郎・小野沢透・藤岡真樹編、昭和堂）が刊行され、第Ⅰ部「外」へ向かうアメリカ――「世界認識」の形成、の第 3 章に拙稿が掲載された。「軍事戦略という理念の発掘――19 世紀後半の米独将校教育と思想的転換」と銘打った拙稿では、おおむね次のようなことを検討した。アメリカの陸軍将校エモリー・アプトンは、世界各国の陸軍のなかでもドイツ陸軍の将校教育に感銘を受け、戦略教育の重要性を 1878 年に力説した。彼と親交のあった米海軍士官スティーヴン・ルースも、ドイツ陸軍を学び、戦略や戦史の教育の必要性を強調して、1884 年に海軍大学校を創設した。1886 年に同校の「戦史・戦略」の教官に着任した米海軍大佐のアルフレッド・セイヤー・マハンは、1890 年に『海上権力史論』を出版し、世界的な名声を博していく。英独日に大きな影響を与えたマハンのもとに、日本海軍大尉の秋山真之（さねゆき）が米西戦争前年の 1897 年に訪れた。マハンは秋山に、米海軍大学校への入学よりも、陸海軍の戦略の自習を勧めたのであった。

こうした概要の拙稿を含む同書の合評会が、2025 年 11 月の関西アメリカ史研究会第 63 回年次大会で開催された。大阪大学の中嶋啓雄による拙稿の評価は、執筆者（布施）による過去の研

究成果の精髄にあたる論文として好意的なものであったが、質問も数点あった。その一つが、マハンから秋山への思想的伝播は一次史料によるさらなる検証が可能か、というものであった。そこで現在、この質問に応じるべく、マハンと秋山の思想上の関係性、いわば師弟関係を実証的に解明しようとしているところである。

彼ら両者の出会いについては、実は以前からかなりよく知られている。「国民的作家」と言われた司馬遼太郎が、1970 年代前後から歴史小説『坂の上の雲』で言及していたからである。司馬は、島田謹二の『アメリカにおける秋山真之』（朝日新聞社、1969 年）等を参照しつつ、マハンと秋山の 1897 年の出会いを、相当劇的な筆致の島田よりは簡潔に紹介した。このあたりの司馬の叙述には、小説とはいえ、かなり正確な印象を受ける。ただ、19 世紀末当時、図上演習がイギリスを含めた諸国で一般的で、秋山が感心した兵棋演習がアメリカで考案されたかのような司馬の叙述には、不正確な印象を否めない。そこで今後の研究では、司馬と同じく島田著を活用していた麻田貞雄の手堅い研究書『両大戦間の日米関係――海軍と政策決定過程――』（東京大学出版会、1993 年）や、麻田著が引用していた秋山の伝記などの史料的文献を手がかりにマハンと秋山の関係性を検証したい。秋山自身の手になる海軍大学校での講義録、『秋山真之戦術論集』（戸高一成編、中央公論新社、2005 年）も、貴重な史料として参照することになろう。

このような史資料を用いつつ今後検討することになるが、どのような結果が予想されるかについて少しだけ触れておきたい。明治期以降、つまり 1868 年以降の日本人は、近代化や西洋化を迅速に進めようとするあまり、欧米圏の文明や思想を無批判に受け入れがちであったとされる。確かにそうした面もあっただろうし、秋山自身、日露戦争中の旅順港閉塞作戦を米西戦争中のサンチャゴ港閉塞作戦から想起したとされる。ところが、秋山の講義録を読むと、逆の印象を受ける。マハンの思想を批判的に受容し、ロジスティクスの面などで独創的な考えを展開していたのではないか、と。なお、小堤盾の『モルトケからシュリーフェンへ　近現代ドイツ軍事思想論集』（彩流社、2024 年）によれば、むしろドイツ海軍のアルフレート・フォン・ティルピッツらの方が、マハンのシーパワー・イデオロギーを鵜呑みにしていたように思われる。マハンの思想が各国でどのように受容されたのかについての国際的な比較も、興味深いテーマであろう。そうした研究を通じ、明治期の日本人の「名誉挽回」になれば幸いである。

（本学教授／IELAK 研究員）

べんたな ventana No.51

北海道のガラナ、アマゾンのワラナ

前回北海道を訪れたとき、店の飲料棚で「コアップガラナ」を見つけた。ブラジル北部出身の私には、ガラナは昔から身近な存在である。アマゾンや北部の食文化、人びとの記憶やアイデンティティを思い起こさせるものでもある。そのため、北海道でガラナを見つけたこと自体にも驚いたが、さらに驚いたのは、それが長く親しまれ、地域を代表する飲料になっていることだった。

後で調べてみると、コアップガラナは 1960 年に、全国の中小飲料メーカーによる統一銘柄として誕生し、特に北海道で定着したことがわかった。六十年以上、人びとに親しまれ、今では「北海道民のソウルドリンク」とも呼ばれている。北海道で育った人びとにとっては、子どもの頃から親しんだ味であり、土地の記憶につながる飲み物なのだろう。私にとって故郷を思い起こさせるガラナが、遠く離れた北海道でも、人びとの思い出や土地への愛着と結びついていたのである。

そのとき、私はアサイーのことも思い出した。アマゾン原産のアサイーは、今では世界各地で知られ、さまざまに食べられている。その広がりをうれしく思う一方で、どこか落ち着かない気持ちになることもある。私が知っているアサイーは、単なる「健康食品」や甘いデザートではない。ブラジル北部の味覚や食卓、日々の暮らしの記憶と深く結びついたものである。しかし、アサイーは世界を旅するなかで、新しい食べ方や味、イメージをまとい、私が知っていたものとはずいぶん違う姿へと変わっていった。

そう、食べ物も旅をする。新しい土地で新しい意味を持ち、そこに暮らす人びとの文化や記憶の一部になっていく。北海道のガラナも、世界各地で食べられているアサイーも、そうして新しい物語やアイデンティティを生み出してきた。それを否定したいわけではない。しかし、グローバル化にはこうした矛盾があるように思う。世界を巡るものは、新しい場所で解釈され、作り替えられていく一方で、もともと結びついていた歴史や文化から少しずつ切り離されていく。新しい物語が広く知られるほど、それ以前の物語が見えにくくなることもある。

そう考えているうちに私は、もう一つのことに気づいた。私がブラジル北部の都市ベレンで親しみ、故郷の記憶や自分自身のアイデンティティと結びつけてきたガラナも、実は、すでに旅の途中にあったということだ。ガラナはそれを育んできた土地から都市の暮らしのなかに入り、飲料となって私の日常に届いた時点で、すでに新しい味や意味をまとっていた。私が知っているガラナもまた、起源の地での姿や意味をそのまま保っていたわけではなかったのである。

ガラナの旅をさかのぼると、アマゾンの先住民サテレ・マウェにたどり着く。彼らは、ガラナが世界に広がるはるか以前から、この植物を「ワラナ」と呼び、栽培化し、その加工法を世代から世代へと受け継いできた。ワラナは単なる作物ではなく、彼らの起源を語る物語にも深く結びついている。何かが世界中の人びとのものになるとき、それがもともと、ある人びとの手によって、ある土地で、ある文化のなかで育まれてきたことが忘れられてしまう。それは本当に仕方のないことだと言えるだろうか。

北海道で手にした一本のガラナ飲料が、私にとって、アマゾンとサテレ・マウェの世界へと開く小さな「Ventana（窓）」だったのだと、後になって気づいた。それ以来、食べ物が旅をするなかで生まれる新しい味や物語を大切にしながら、その旅を可能にした人びとの知識や記憶も、ともに伝えていくことはできないのだろうかと考えるようになった。

（モイゼス・カルヴァーリョ／本学教授・IELAK 研究員）



いえらっく・めも



2026 年のサッカー W 杯は、カナダ･アメリカ･メキシコの共催で開かれた。48 か国に拡大された大会で、初出場を果たしたカーボベルデが注目された。人口わずか五十数万の小さな国の快挙である。

大西洋に浮かぶこの島国とブラジルは、ポルトガル語だけでなく、奴隷貿易と植民地支配の記憶によっても深く結ばれている。文学の面でも縁は深い。1936 年にミンデロで創刊された文芸誌『クラリダーデ』は、ジョルジェ・アマードやグラシリアノ・ハーモスら 1930 年代ブラジル北東部の地方主義文学に触発されて生まれた。カーボベルデが自らの言葉と現実を文学へ立ち上げるとき、ブラジルはひとつの導きの灯だったのである。

ラテンアメリカの視点から興味深いのは、決勝が旧植民地アルゼンチンと旧宗主国スペインの一戦となったことだ。かつての植民者と被植民者が相まみえるとき、そこには独特の緊張が走る。その緊張は独立が新しいほど生々しく、第二次大戦後にヨーロッパ帝国から独立したアフリカ諸国（1975 年に独立したカーボベルデもそうだが）にとっては、なおさらであろう。試合は延長の末、スペインが 1 対 0 で二度目の王座に就いた。

もっとも、ブラジルでは多くの人が「敵国」アルゼンチンを応援した。史上最高の選手の一人メッシへの敬意ゆえである。アルゼンチンと他の南米諸国との確執はしばしば冗談の種となり、「アルゼンチンはラテンアメリカではなくヨーロッパの国で、南米の仲間意識など要らない」と揶揄されるほどだ。それでも、この祭典が世界中のファンに大きな歓びをもたらしたことに変わりはない。植民地の影とライバル意識のあわいで帰属とは何かを問うこの大会は、観る者だけでなく学ぶ者にとっても豊かな主題であり続けている。

（FM）

のてぃしあす NOTICIAS

＜第 24 回ラテンアメリカ教養講座　開催＞

2026 年 6 月 5 日（金）より毎週金曜日、全 4 回にわたり、ラテンアメリカ教養講座「キュレーターが語る大学ミュージアムの世界」を開催した（後援：京都ラテンアメリカ文化協会）。プログラムは以下のとおり。

第 1 回（6 月 5 日）
南　博史（京都外国語大学教授／元国際文化資料館館長）
「生け花と古代アンデス美術品〜国際文化資料館所蔵小原豊雲コレクションについて」
第 2 回（6 月 12 日）
羽生　由喜子（角屋もてなしの文化美術館副館長／京都外国語大学非常勤講師）
「芸術家 忍 Tobita の不思議な世界」
第 3 回（6 月 19 日）
芳野　明（嵯峨美術大学教授・附属博物館館長）
「ジャマイカのアートって？―近代ジャメイカン・アートの成立」
第 4 回（6 月 26 日）
荒田　恵（天理大学附属天理参考館学芸員）
「天理参考館のラテンアメリカ資料」

＜ IELAK 講演会＞

2026 年 4 月 29 日（水）
オリビエ・ル・グエン（Olivier Le Guen）氏
（メキシコ社会人類学高等研究所教授）
「キリスト教布教下における『チラム・バラム』の書：その内容、形式とマヤ人書記による利用」
（Los libros de Chilam Balam: contenido, forma y su uso por los escribanos mayas en la cristianización de su mundo）
2026 年 5 月 8 日（金）
ペリグ・ピトロウ（Perig Pitrou）氏
（フランス国立科学研究センター（CNRS）上級研究員）
「メソアメリカにおける生贄と供物：エスノヒストリー（民族史学）と民族学の連携」
（Sacrificios y ofrendas en Mesoamérica: cómo colaboran la etnohistoria y la etnología）
2026 年 6 月 3 日（水）
大泉　陽一　氏（Golden Bridge Intelligence Ltd. 代表、経済学博士）
「21世紀のモンロー主義：地政学的分断が進む中南米と大国間競争の最前線」
トランプ政権が掲げる「力による秩序」とベネズエラへの軍事介入を出発点に、米中関係やスペイン・EU の動向も視野に入れながら、現在の国際秩序の行方について多角的に論じた。ヨーロッパ在住の講演者ならではの視点による最新情勢の紹介も行われた。

2026年9月1日発行（年2回）
発行　京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター
〒 615-8558　京都市右京区西院笠目町 6
TEL: 075-925-6853
E-mail: ielak@kufs.ac.jp